
君と僕の共同生活

亜夏琶牒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と僕の共同生活

【Nコード】

N3141V

【作者名】

亜夏琶牒

【あらすじ】

「昭和65年の夏、私は、死にました」

梓は、平凡な男。

ある日自分の能力に目覚めてしまう。

その能力は、たちまち世間に広まり、梓は、「怪物」と言われるようになった。ただ、皆と仲良くしたい、普通に生きていきたい、そんな願いを持ち始めた梓は、ある男と出会う。

これが、世間一般的に言われる、出会い、とかいう奴なのか？（前書き）

けっこう、あっち系のことが多く書かれている可能性があります。

「あつ、無理・・・」

とか、思っ前に、回れ右、ですよ（笑）

これが、世間一般的に言われる、出会い、とかいう奴なのか？

「近づくな、怪物がつー！」

「気分が悪くなるのよ・・・、あなたといると、出て行ってちょうだい、部屋からも、この家からも・・・」

能力に目覚めて、使ってしまったとき、こう言われた。

それから二年、ボーっとして生きてきたが、どうしても、能力はばれてしまうものなのだ。

ただ、皆と楽しく生きていきたくったのに。この能力で、人を助けたかっただけなのに・・・。

「今日、僕は、自殺します。」

高層ビルの、誰にも、見えない場所で、小さく、小さく呟いた。

僕は、一步、前進し、頭から、落ちていった。

これで、終わる。これで、辛いことから逃れられる。

ああ、嬉しいなあ。

目が覚めると、天井が見えた。病院の天井ではない。誰かの部屋の天井だ。誰の部屋なんだ？

つてか、僕は、なんで、生きているんだ？

これも能力の一つ？

ものすごい数の疑問が浮かんだか、まずは、ここの住人をさがさなければ・・・。

「やつとお目覚めか？」

声のした方を見ると、そこらへんの男とは比べ物にならないほどかっこいい男がいた。

「びつくりしたよ、君を見つけたときは。足の骨を折ってたんだよ、痛みはねえ？」

「ないですけど・・・」

「そうか。それはよかった。今、コーヒーを入れるから。ブラック

で、大丈夫？」

「大丈夫です。」

そうすると、彼は、微笑み、コーヒーを注いだ。

「お前、名前は？」

「コーヒーを机に置きながら言う。」

「美崎梓です。」

「ふうん、俺は、倉田馨だ。よろしくな。梓は、どこから来たわけ？」

いきなり、呼び捨てかよ……

「さあ、どこでしたっけ？」

「なるほど、家出か。」

「家に帰らないの？」

「帰る家が無いんでね」

「友達は？」

「いませんよ、そんなもの。」

「そうか、じゃあ、しばらくは、ココへ泊まればいい。部屋なら有り余ってるしな」

「あんた、結婚してないの？」

「あいにく、相手がいないもんでね。」

「つてか、あんた何歳？」

「25だよ、けっこう若いだろ？」

めんどくさそうな奴だな……

「じゃ、遠慮なく、ここにいさせてもらおうとするよ。」

「よろしくな、梓、俺の事は呼び捨てでいいから」

「そ、よろしく、馨」

共同生活をするけれども・・・（前書き）

ちなみに、毎度のように、サブタイトルは長くなりますので・・・
よろしくです。

共同生活をするけれども・・・

共同生活が始まって一週間、家からほとんど出ない僕が家事全般を担当するようになった。

馨は、どうやら会社のお偉いさんの息子らしく、けっこう稼いでいるようだった。会社の用事が多く、家に帰るのはいつも日付変更時。まあ、その間何してもいいわけだから、別にいいけど。

「ただいま」。マジ疲れたし・・・。。梓あ、片揉んで・・・。」
俺は、お前の何なんだ・・・。。

「面倒くさいから、いや。」

「つれねえなあ・・・。」

「別に、ご飯いる？」

「いる。梓のご飯ものすげえうまいよな、店出せるぜえ？」

「人前に出ることが嫌いだし。」

「そつか・・・。。惜しいな・・・。」

そういつて、僕の頭をなでようとした時。

「風呂はいる。」

急いで立って、僕は、風呂へ直行した。

僕に触らないで欲しい。

そんな思いしか、心の中にない。

ああ、人とゆうものが、怖い。

普通の人を見ると、自分が否定されていく
こいつを見ると、特に・・・。。

僕は、自信に満ち溢れてる奴が大っ嫌いだ。
こいつは、一番嫌いだ。

一週間一緒にいて、よくわかった事だ。

明日、ここから、出て行こう。

こいつといると気持ちが悪い。

明日、何処へ行こうか？
いいや、そんなこと。誰も追っては来ないのだから・・・。

たとえ、僕がいなくなっても。

もし、この地球に人間が2人しかいなくて、その1人が僕で、僕が消えてしまったら、もう1人は、どうするんだろうか。きっと悲しむんだろうな。

でも、この地球には、70億人近くの人間がいて、その中の1人が消えてしまったとしても、誰が悲しむんだろう。悲しむわけ無いじゃないか。

だから、僕は、消えるんだ、「怪物」だから、いちゃいけない。

馨には、どういおうかな。いや、言わなくていい、別に心配しないだろうし……

次の日、馨はいつも通り

「行ってきます。」

と笑顔で言った。僕も、久しぶりの笑顔だからわからないけど笑顔で「行つてらっしゃい」

と言った。彼は目を見開いたが、微笑んで、玄関のドアを開けた。

僕は、いつも通り、部屋の掃除をして、洗濯物を干して、買い物に出かけて、1人分の食材を買った。

馨の大好きなビーフシチューをしてあげた。

そして、メモ帳に手紙を書いた。

手紙を書き終わると、音も立てずに、静かに、この家から出て行った。

「ただいま」

シーンとした、部屋には人の気配はない。

「梓？」

返事は無い。

「梓?! 何処にいるんだよ! 梓!!」

部屋に駆け上がると、一つの黒い、メモ帳があった。そこには、梓の女の子みたいな字で、こう書かれていた。

馨へ

お帰りなさい。

今日は、馨の大好きなビーフシチューをしたんだ。多分、おいしいと思うから、食べてください。

突然いなくなってごめんなさい。

でも、ココにはもういられないから、きっと迷惑掛けるから、出て行きます。

どうか、探さないで。

探したとしても、僕は、あなたを知らない。

馨も、僕のこと忘れて？

さようなら。

梓より

「何で？何だよ・・・」

梓が来て、一週間、俺は、何をしたんだ？
気付けば、走り出していた。

何処だ、何処にいるんだ。梓・・・。

「何を探してるんだい？」

変なおばあさんがいた。

「背が175くらいで、痩せてる男見なかったか？」

「知りたいかい？」

「知ってるのか?!」

「ああ、知ってるさ。○ 駅の橋の下さ・・・。」

「本当か？ありがとう。」

「早くいきなあ。きえてしまっまえに・・・」

意味はわからなかったが、急いでその場所へ向かった。
そこへ着くと、梓はいた。

「いた・・・」

橋の下の男2人。（前書き）

香る目線です。

橋の下の男2人。

「いた……。」

彼は、体操座りでうずくまるような感じになっていた。
おそろ、おそろ、近づき

「一緒に帰ろう？」

びつくりしたように顔をあげた梓は、逃げようとした。

「梓っ……!!」

「来ないで……。っ」

「なんで……。？一緒に帰ろうよ?!なんで、出て行くだよ、なんで……。」

「だって、俺は「怪物」だからだよ……。」

初めて梓が俺といった。そして、怪物とは？

「怪物……。？」

聞きなおすと梓はうなずき言った。

「そうだよ、俺は怪物さ!この能力を発動すれば、人をボコボコにすることだって、たやすく出来る!!人を殺すなんてかんだ……。俺は、梓を強く抱きしめた。

「人を殺すなんて簡単に言うなよ……。っ」

「俺に触れるな……。」

「嫌だ。」

「触れるな!!」

「嫌だ!!俺は梓が「怪物」だろうがなんだろうが、お前を放さない!!」

「はあ?ふざけんな!お前、死ぬかもしれないんだぞ!わかってんのか?!」

「わかってる!!わかってるさ……。っ」

2人の間に、少しの沈黙が流れた。その沈黙を破ったのは、髻だった。

「俺が、なんで、お前を助けたと思う？」

体を離し、そこに座らせる。

「知らねえよ。」

「お前を見たとき、お前から目が離せなくなった。」

「意味わかんねえ。」

「一目ぼれってやつだよ」

梓の顔が赤くなるのがわかる。

「なあ、帰ろうぜ？」

「なんで、そこまでして、俺を・・・」

「だから、お前のことが好きだって言ってたんだよ。」

そう言つて、俺は、梓に、キスをした。

「んっ・・・ふう・・・」

下を絡めあう、深い濃厚なキス。

「もう、ギブ？」

梓は、肩で息をしている。

「ハア、ハア、黙れ・・・ハア・・・んっ・・・」

もう一度キスをする。

「はう・・・んっ・・・」

「家に帰る？」

「帰るわけねえだろ・・・」

「じゃあ、これ以上はやめとくわ」

梓は、うずうずしたように、下を向いていた。

「しょうがねえなあ。こうなったら、最後までしてやるよ・・・」

橋の下の男2人。(後書き)

次回、やりますっ!!

橋の下でやってんだから、誰にも見られてないでしょ？（前書き）

今度は梓目線で行きます。

橋の下でやってんだから、誰にも見られてないでしょ？

こいつは、何をしてんだ？

男にキスとか、ありえねえだろ。しかも、最後までやるって……。

想像してみたら、顔が赤くなるのがわかった。

「待て待て待て。何、最後までやるとか言ってるんだよ。俺達、男だぜ？」

「性別なんてクソ喰らえ……。」

意味が解らん……。

「じゃあ、家に帰るっ！！帰るから、やめてくれ……。」

「いや。もう、遅い。」

そういうと、また、キスをした。

「ちょ……んっ……ふう……。」

キスをすると同時に、アソコを触りだす。

「んんっ、あつ……はあ……。」

頭が真っ白になる。このままじゃ、流される……！！

「やめろっ……。」

「何、いつてんの？感じてるくせに……。」

ズボンの中に、手を滑り込ませてきた。

「はう……あつ……ああ……。」

「いいねえ。その顔……鏡で見せてあげたいね……。」

そういつて、Ｔシャツをめくり上げる。

もう、力が入らない……。

「どうしたの？抵抗しないとやられるよ？」

「……っせえ。力が入んねえんだよ……。」

「へえ、じゃ、思うがままにやらせてもらうよ」

そういつて髻は、俺のズボンを脱がすと、四つんばにさせた。

「なにすっ……あああ……！！」

俺のアソコに、指を入れてきた。

「大丈夫。すぐに、気持ちいい所探してあげるから・・・」

彼の指は、俺の中をかき回していく。

「あっ・・・ん・・・はう・・・」

「コレもダメかぁ。じゃ、ココはどうかかな？」

「ひゃうっ！！！！ああ・・・あ・・・」

俺は、口を押さえた、でも、遅い。

「ココ・・・」

馨は、そこを、かき回す。

「はぁ、あう、ひゃぁ・・・」

「んじゃ、二本目いくか。」

馨は、指をもう一本増やした。

「もう、だめえ・・・」

「いきなよ・・・」

彼は、最後に、一番敏感な所を強く、突いた。

「ああああ！！！！」

「早いな・・・」

こいつ、ゼツテエ殺す・・・。

「ハア、ハア・・・」

「んじゃ、次は、いれるからな・・・」

そういつて、自分の固くなったものを、俺のアソコに、入れた。

「ちよっ・・・いたっ・・・」

「大丈夫、気持ちよくなるから。」

「でもっ・・・痛い・・・」

「ほら、全部はいつた。」

彼は、ゆっくり、腰を動かした。

「ああ・・・」

「ほら、痛くないでしょ？」

「でも・・・」

「でも・・・なに？」

「なんでも・・・ない」

「じゃ、はやくするから・・・」

馨は、腰の動きを早くした。

「あっ・・・あっ・・・」

「梓の中、いいよ・・・すごく・・・気持ちいい・・・」

「ああ・・・あう・・・」

「好きだよ・・・梓・・・」

彼の声は、低くいけど、甘くて・・・俺を、壊していく・・・。

ああ、もう、抜け出せない・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3141v/>

君と僕の共同生活

2011年10月9日12時34分発行